

ちは、「女性の仕事」であるソーイングを習得することでその役割をより高度に達成できると考えていた。一方、若い女性たちはソーイングをすることで、両親を中心とした「アイガ」に対する責任を果たそうとしていた。概して家計の補助という意識にもこのような役割観から影響を受けているので、女性たちがソーイングプログラムに「参加」する理由の背景には「ファアサモア」による行動規範が大きく関連しているといえる。

サモア女性の「参加」の現実と現在の開発パラダイムにおいて語られるより望ましい女性「参加」のあり方を比較してみると、上述した3つの点全てにおいて相違が観察された。そして、サモアという地域のコンテキストに基づいて考察されたサモア女性の「参加」は、「開発」における「参加」が複雑であること、それゆえに「参加」が「オルタナティブな発展」を提示していく可能性を有していることを示していた。

以上より、「開発」において「参加」の概念が「オルタナティブな発展」として構築されていくためには、発展途上国におけるダイナミックな“地域性”を明らかにすること、そして、それを開発理論や実践の場にフィードバックしていく方法を模索していくことが必要であるといえる。

■ 卒業論文要旨 ■

愛媛県南予地方の鹿踊： 伝統芸能と生きる人々

栗田 文

愛媛県南部、南予地方に伝わる伝統芸能「鹿踊」の現状を、関係者からの聞き取りや祭礼での観察から記録した。また、地域住民と伝統芸能の関係を考察し、その問題点やそれに対する試みを調査した。鹿踊は、江戸時代に伊達氏が仙台から宇和島に転封された時、伝えられ、変化した。また、南予各地でも伝播した結果、様々なバリエーションが見られる。本研究では、宇和島市裡町の八つ鹿踊、城川町遊子谷の七つ鹿踊、長浜町櫛生の五

つ鹿踊、城辺町緑の五つ鹿踊、御荘町貝塚の五つ鹿踊というコントラストがはっきりした五つの鹿踊を詳細に調査した。その結果、地域性、人々の思い、伝承の困難さと各地の試みを検証できた。伝統芸能が容易に消滅すること、伝承・保存の困難さ、後世に伝えようとする人々の熱い思い、人々の自信と誇りが良くわかった。

喜連川町の温泉分譲住宅地開発と地域社会：定住者の生活史からの考察

佐藤 真紀子

栃木県喜連川町では、地域活性化のため、「フィオーレ喜連川」という温泉分譲住宅地が開発された。転入者の大部分は、首都圏からである。新世代のニュータウンということだったが、その多くは、老夫婦が定年後のセカンドライフを送る住宅地となっている。過疎化を食い止めたものの、高齢化の歯止めとはなっていない。一方、定住ではなく、別荘として購入した人々もいる。また、市街地から離れているため、旧来のコミュニティとのつながりはない。多様な価値観を持つ人々が、この新しい地域社会を形成している。地域社会の特徴を考えるため、定住者8世帯にインテンシブなインタビューを試み、各世帯の生活史を詳しく検討した。その結果、ここに移住した背景や理由が明らかになった。老夫婦は、リゾート的な環境に魅力を感じ、移住してきた。若年夫婦は、交通の便が悪くないので、通勤など地理的な要因で移住してきた。単身者は、自然環境の魅力に引かれ、移住してきた。

高松市丸亀町商店街におけるファッション品店の展開と活性化について

永井 摩衣子

高松市中心部は7つの商店街から成っている。三越百貨店に近い、北部の丸亀町商店街はミセス向け、南のである商店街ほどヤング向けと、以前は、